

実践事例

(郷土) 梅園小学校 6年

社会をよりよく創り上げる子どもの育成

～ 「梅園百歳プロジェクト」活動を通して～

4月～11月(55時間)

1 ねらい

(1) 梅園百歳プロジェクト

平成28年は、梅園小が梅園の地に移り、校名が「梅園」となり、梅園学区も誕生して100年の記念の年である。そこで、梅園小・梅園学区の百歳の誕生日を祝い、学校・学区をよりよく創り上げる活動として、平成27・28年度「梅園百歳プロジェクト」として取り組んだ。これは、まわりの社会に順応するのではなく、子どもたちが梅園という社会に働きかけ、よりよく創り上げることをねらいとした。まさに子どもたちが社会への視野を広げ、自らの力で問題解決していく主体性を育てる教育活動である。

(2) 求める子どもの具体的な姿

- ① 子ども自らが、課題を見極め、その解決のため考え実行し、評価、改善する子ども。
- ② 自分以外の人に関心を持ち、他の人の立場や心情を理解することができ、その人に共感することができる子ども。なお、自分以外の人とは、身近な友達から全校の子ども、活動の対象となる学区の人々、専門業者などの第三者までを含める。

2 実践の概要

1 仮説

子どもたちが「梅園百歳」を周りの人たちに伝え知ってもらい活動をしたり、学校を擬人化し学校が喜ぶ活動を全校で工夫したりしていけば、子どもたちが自分たちの周りの社会(梅園)に働きかけ、それをよりよく創り上げていこうという思いを育てることにつながるであろう。

2 具体的な方策

(1) 梅園百歳かるたの作成【実践1】

(2) 記念Tシャツ・ポロシャツ、タオルの作成【実践2】

(3) 百梅くんマスコットの作成

(4) 全校もちつき大会

(5) 梅ジュース・梅かんでん・梅料理の調理・試食

(6) 梅園百歳フェスティバル(平成28年10月29日実施)

- | | | |
|-------------|------------------|------------------|
| ① テーマ搭の飾りつけ | ② 梅園プライドダンスの作成 | ③ フェスティバルポスターの作成 |
| ④ みこしの作製 | ⑤ 記念イベント(各学年・学級) | |



フェスティバル 希望の風船飛ばし

(1) 実践1「百梅かるた」作成

「百梅かるた」は6年生が中心となって、梅園小・梅園学区の歴史や文化等を題材として作成したものである。この活動は、梅園百歳を記念したものであるとともに、自分たちがこの学区に住みながらも、あまりにも学区の歴史や文化等を知らないということから、6年生が自ら調べたものを「かるた」にして、多くの人に伝えようとしたものである。かるた作りに取り組んだ学級は、まず、学区のことを調べる活動を始めた。梅園小の歴史や文化などがまとめられた書物やインターネットで調べ、何をかるたとして残したいかを話し合った。「あ」から「わ」までの44音に入りたい言葉を決定した後、かるたの文句をグ

ループに分かれて1つずつ考え、学級だけでなく学年にも広げて協力を依頼していった。文句を考える過程では、実際に学区の多くの人から聞き取り調査を行ったり、かるた作りの協力を依頼したりして内容を作り上げていった。

読み札の案がグループごとで明らかになると、子どもたちは文句の内容に着目し、互いを意識し合うようになってきた。「難しすぎる詩があり、もっと簡単にすべきではないか」という疑問が子どもたちに広がった。そこで、教師は、よりよいかるたにするための学級全体で話し合うかわり合いの場を設定した。そこでは「その意見とちがって」と、相手の意見に対する率直な発言が見られ、話し合いが活発に展開された。子どもたちの発言からは、このかるたを通して、学校全体、学区に視野を広げて、自分たちの納得のいくかるたを粘り強く作りたいという強い意志を感じた。この話し合いの結果、読み札の文句は簡単にするのではなく、そのままにして裏面に説明を載せるという結論に至った。

(2) 実践2「記念Tシャツ」作成(平成28年度)

この活動は、「ぜひ梅園百歳を記念したTシャツ・タオルを作りたい」という6年生のA子の発案を実現化したものである。子どもたちは、「『梅園小学校、学区の人に』『男女関係なく』『喜んでもらえる』ような梅園百歳をお祝いできる」Tシャツを作りたいと強い思いをもって取り組んだ。それをもとに、デザイン案を考え、どのデザインがよいかの検討が進められた。



資料1 デザイン案A(左)とデザイン案B(右)

最終的に絞られたデザインA・B(資料1)に対する考えについて検討し合う中で「デザインBはシンプルで老若男女関係なく着られる」、という発言があった。この発言からは、よりよいデザインへと検討していることが分かる。しかし「どちらでもいいと思う」など、意欲はあるものの活動の停滞を感じさせる姿も見せた。そこで教師が「写真展の時はどうしたかな」と、活動を振り返るきっかけをつくった。この学級では梅園百歳写真展も担当し、その講師として学区の写真店から写真の撮り方を学ぶとともに、審査員として協力をいただいていた。そのことを想起した子どもは「デザインをプロの人に見てもらってはどうか」というように、写真展の活動をヒントに次の活動を考えた。このように自分たちの今までの活動をヒントに課題解決の糸口をつかむことができた。そのことをもとにデザイン会社15社に意見を求める手紙を送った。その返信をもとに再度の検討が行われた。

子どもたちは「費用や宣伝の仕方、素材、売り方」などを挙げて、他者からTシャツ作りを学ぶことができた。新たな視点を受け、子どもたちの判断基準がレベルアップし、よりよいTシャツ作りへと進んでいくことになった。そして、デザイン案が完成した後も、学年、学校、学校職員に意見を聞く意欲的な姿が見られた。

3 実践を振り返って

記念Tシャツ作りでは、「デザイン会社からアドバイスを聞けてよかった」と、自分たちだけの考えで満足するのではなく、他者の意見を聞くことを通してTシャツを完成させたことに喜びを感じていた。まさに子どもたちが主体となってよりよく創り上げ運営していたことが分かる。百梅かるた作りでは、自分たちの活動に自信をもち、全校の子どもを視野に入れ、まさに梅園という社会をよりよく創り上げようとする姿を見ることができた。